

#昭和99④「終戦直後の鹿児島と奄美出身者」

「鹿児島の近現代」教育研究センター 特任助教 中嶋 晋平

令和6年10月14日、鹿児島県立図書館第1研修室で連続トークイベント「#昭和99」の第4回「終戦直後の鹿児島と奄美出身者」を開催した。当日は筆者のほか、戦争を語り継ぐ遺児の会の代表で、奄美出身の吉見文一さんにもご講演いただいた。

終戦直後、鹿児島港は奄美群島や沖縄を中心とする南西諸島への帰還者の送出港に指定された。これにより、戦時中に故郷を離れた奄美の人々は、帰郷のため鹿児島市を目指した。ところが昭和21年3月17日、GHQは突如、鹿児島大島間の渡航を6ヶ月間禁止する。その結果、奄美出身者は帰郷することができず、鹿児島の地で様々な選択を強いられることになる。終戦から軍政期という過酷な時代を奄美の人々はどのように生き抜いたのか。このことをテーマに講演と意見交換を行った。

まず、戦時中から軍政期までの少年期を徳之島で過ごした吉見さんにご講演いただいた。吉見さんの父親は昭和18年にニューギニアで戦死され、吉見さんは父親の顔を知らないまま、母一人子一人の貧しい生活を軍政期の徳之島で過ごした。その後、父親の手紙との出会い、ニューギニアへの訪問、家族の働きかけにより、戦争の事実を伝えなければならないと令和4年に戦争を語り継ぐ遺児の会を設立、精力的に活動されてきた。会場では戦死した奄美出身の兵隊が遺した日の丸の国旗などが披露され、戦中・戦後にわたって奄美の人々が過酷な生活を強いられたことを話された。

続けて筆者は、同郷者メディア『奄美』を用いて、終戦直後に本土部の鹿児島に残された奄美出身者の実態について講演を行った。『奄美』には渡航禁止の間、同郷者同士で助け合い、懸命に命をつなぐ奄美出

身者の姿が描かれていた。また一部の奄美出身者は帰郷を断念し、鹿児島周辺での生活再建を決意、それが鹿児島市をはじめとする周辺地域の変容を促したことを説明した。

その後は参加者との意見交換に移り、昭和30年代に甲突川周辺に奄美出身者と思われる人々がバラックで生活していたことなどが話され、失われつつある終戦後の鹿児島の記憶を記録として残していくことの重要性が確認された。



撮影 平岡正三郎氏

〈第4回〉「鹿児島の近現代」連続トークイベント 「#昭和99」

終戦直後の鹿児島と 奄美出身者

戦後の鹿児島のこと、語り継ぎませんか？

2024年

10月14日(月祝)

14時～16時(開場：13時30分)

場 所 鹿児島県立図書館(第1研修室)

※駐車場は利用できません。公共交通機関
でお越しください。

参加費 無料

どなたでもご参加いただけます

講 演 吉見文一 (戦争を語り継ぐ遺児の会・代表)

話題提起 中嶋晋平 (鹿児島大学・特任助教)

主催 鹿児島大学法文学部附属「鹿児島の近現代」教育研究センター

お問い合わせ 鹿児島大学法文学部附属
「鹿児島の近現代」教育研究センター
☎ 099-285-7532 ✉ kingendajim@leh.kagoshima-u.ac.jp

